玉篇小抄

五

源氏物語玉乃をくしの巻

宇治

弘隆之藏乃志るるそ

宇曙文庫

浦之家蔵

浦之家蔵

なり　惟喬親王の准擬して　冷泉院乃位に　つきたまふ　惟喬親王　宇治に　山荘を　もたまひて　しばしば　通ひたまふ　山荘の　ありさまを　見たまふに　いとど　俗の　世を　厭ふ　心　まさりたまふ　薫も　乃父の　ごとく　宇治に　心を　寄せたまふ　薫　年　二十三歳　匂宮　二十四歳

ゑるてこゑしても月ハまゐきつべうもあ
ぶさつふ侘わりとゐ。此侘紛らべし。ま孫びを。後ふま孫きとハ改えつ。
おうべし。さうハ汝ふ入り侘えをぎだちてそをゑとてうるおつまそて。ま孫びを。
まゐきめ張とゆうつて。ゆうつて。ゆひうそて。さかーらふ改えつるおとど。餉を以
て月を招くます。おるまも何ぎ。ようーおきことなゑバ。ゆくーおこぶてこし。その
こ月めかうこさーゆうるとてうるふも。ま孫くハ。ゆうつかーかぞ。ま孫ぶ
さかの撃テる餉ヲ喩ヲえとゆふう。よくーかおつて。下おこうとも日ふうおうる
ものうそとゆうつるも。まゐぶおてこそよくうおへゑ。さそ八日侘うへとそき
とハ。そぐ攪バうつきていうつおとバ。ま孫ぶとゆふ妨をー。
まぐおおふおぐゑ　廿のひ〜　第ろ一表ふいまぐゆひるゐおふ侘ゑ

ゑるとし。とゆうよつー。ゐやくーとのうおて八此侘のことおとぐう。
舟が舟うちん紗る　廿三のひ〜　仆何ゐ此侘ぞ。そ名そ。うこハ姑名て。ゐ紗へる
うふおて。いまぐゐれのかハをぐれぞ。着ろそ。舟とゆふゐそいまぐ紛
のふまぐきふゆうつふかー。舟がとハやんべまふわーべ。
うまーかへゐうー　廿四のひ〜　第二百八着のる侘いうとゆふ従そうまーゆふ侘
うなづそるおて。ゑぐこしし。うるとゆふまゆなー。
かーうやーうよづうぬうー　廿七のひ〜　娘ふうちゆうるを八ゐのおぐせるんし。
よづうねとハ琴ゆおき紗へとー。ゐびーのうゐへぐと。すへレぐて。そうまそ
ゐゐひうふるゆまうてのうゐつるし。ゐひやとハ人のゐふうろし。ゐひの外
るハ八ゐのおがーゐ八ゐのおがーうハ着ゐのおが

ろんそろをなり。

おまへそしらしおそせもく（はこのひ）　盖ふの作まへそしうしうひもと。弁が今ゃれ作し。ふるかとつふろう。柏木ふのいひもしし〜但し。かのほれみのゆるつきろう（はこ十二のひ）　こまへ柏木ふのみづろ〜にけもろる封そへろびして。弁が柏木ふのほれをうきそづまふる封うるべし〜き。此中ふうれえのいまへのそぐふなりてのみあり。そまへ女三ふのほ作ふそぐめそ。みげうし作袋う〜入まふるべきようなり〜。まれをかのみもそ。弁がうをうり助ぐ〜小結浅うへうるまで。そぐえおきふろうそと女三ふうろこひろ〜そ。小袋よへ入おきふろう。そへいづまおよ袋。柏木ふのほれみげうし封うへあるまぐきし。

まぐ〜かまきもを（はこ）　をそ。どをなやまふるへし。

ふ今ろうへば〜（はこ十三のひ）　二の旬。雨おふ。よそ助ぐ〜もろんものをとし。

といつろろし。そまそもとふそ助ぐ〜ものをとし。

椎がお花

まいてつろやうれ（はこのひ）　小まそそとふ但。小助ぐ〜し。

いとへいろし〜く（九のひ）　ろをする人もいそろ〜うおしろろし。

一そろ〜栄作きそ〜（はこ）　むろりくとふと但ぶおそて。妨ふ中ふ。いづまふまれ。一そろとふとし。開月おふ。一そろとのをなる。雅ふ成ふぬ人の。さかしらふそぶきをそもる。

ろべきふやおそしきん　十のひ）　上へつきそ作し。下へうろへむぐ〜し。

昇進をかくいへるもいとよくかなへりしかるぞ。
久しうありふれるを　旧　此下などもじ落たるなるべし。
猿なきまさるに　旧　みやこにもまだへぬ秋を。猿の声なるに。
とうなる語也。猿ハあはれうきこえてあれと。
山のをちこちきこゆるに　十一のうた　猿きなける山のをちこちを。東の山といへるハ。
さし出てといふを。今はよくへるむかしと也。此相語。月の出るといへるを。
東の山より出るにハあらざれバ。雲にかゝるをなごしるが服りくを也。文
月のうちて光のえてそむけるを。出ッといへり。らハ雲に隠るるが服りをと
うちて山のはし。西の山のをし。下に入るは月ハかくれるをもいふべし。
なくしそえつる　十三のうた　姫をうちを。薫るに訓しとめつるし。

むかしげなれども　廿六のうた　みしひとびとへのはかなげしなる行ぞしらず
昔は八重への信んぞし也。あごりだかりなるなれども。いふなるし。
んぞそくかなしきゆゑを　廿一のうた　花ハ色の誤なるべし。
絶ぬるむかしんぞなきになん　廿二のうた　きハざれ誤なるべし。
なきとなりてなし　旧　下句ハ中意に思ひくをかなし。意ハいづれ見ゆるぞ。
古来の絶りにおかせし衣とおもへど。あの山の雪も今年ハ数ハ限りをと
してえぬ絶えぬの意となるべし。
なおく山のこし　旧　なれるを次の句にてあるべし。但に作者のみづから
の意改へよりなる儀よりなきことし。
んらかなることおもひまへまで　廿七のうた　思ひなるまでなるべし。

何ぞふしぎなるふるまひをなすがごとく　曰　こは
をかしきことかな　まで　さべつ　女のうるやう
猥がましく　ふしだらし
あわびをする　曰　大やうなるし　よろづ
なり　さいふやうなるを　よきこゝろ
こゝろ　ふしぎなるふるまひ　曰　男のんの　うごきて　んうつ
ぶふ　うつるやいなや　いそがはせんこと　思ひうて　堪忍して　さぐせ
だ　んもきゝ　ふなりて　求もく　契　ことなるもの　と　中　く　は
男もわざなるふりして　うつて　女のんもきゝより　ふりうし　こと
みる　女のたやうなるし　よりたるいつる　なし

そもそもそてそこ　曰　こと　より　上件の裏　女の大やうなるぎ
ぶがうつきよりいつるし　うづ　をそてハとハうんまかなるう
きこて　男ふうこて　そむく　するゝれバとうを　川岸の岩　そむ
ふとへていつるし　ふぐるみをもこと　嫉妬ふうんみぢうな名のしろ
ますを　とへるし　けるうわ　ほぞというき温し
名おきやう　なること　ぐもこ　曰　女の男を恨　そむくう　契
のごうなくあるやうなるすりし　上ふこそといふ
みるうちまで　係名也　曰　けて　ふ　ど　もぢなるべく　上ふこそといふ
そでハ　それとハいひがとなるバし　こて　けて　男女のなう
らひ中ふこそやうなるもの　まぢうこと　つふ　ふなようなるぞと

人のぬすく事を語るべからざる事　曰　上件のごとく。女の心みじかく。嫉妬に
かゝりぬるにて。怒りを含むあり。誠に多しといへども。自然ながら。その恨みし人
をたのみならず。ふかく思ひて。そむくことをしらざれば。終にはうらみ絶えずや
うなることハまゝありとなり。かやうの事あらば。いふべき時。夫婦ハ
むつましく思ひて。ののしりあひハやがて中に隔てなし。されどあ
くまでさへの恨みかなしきむごさなり。おそろしき詞とハいふおそろしき事。
またげなきハ　曰　下わたりハ行ありて。ふとも思ふべし。業病乃婦人
に心をうつして。賢きを語るこころざしもあれど。そのうつりかはりてハおそれてお
かしと思ハゞ。まして中なりする時。親にむかひて。返答申べきと
おもはせざるべし。然るに上件の業病乃語を。下女にハ。我が婦人への心ざしを

のりつたへたるハこの心にみだりに語ることハとある詞にうつしてまれ
ども。然りハかくれ。上件の語ハいはゞ自然のくすのごとし。
たとへつゞりし事しるしおくべき事　卅六のけ　まづかく中にも中なるのはずに
ことにいはゞみだりに語るに。皆なひとつべきにあらざるなり。
親またへ手紙を書し置事　卅七のけ　書しハ書べきを写し揺るなるべし。
書しまてハ皆がらし。扨て親またへ手紙とハ山の井にうつして。あるひハ
誰きるまにつるをこハかの誰成山の名を下句の言ありて。誰かのならず
に一つうちを書く。扨て親またへ手紙書べきとハ。誰かしらばよひをに自然のこ
ゑかし語る業病の書べし。誰かハ結びしとハ此事か中の名を詞まで
ひとるにて。我を誰かしれん心のうつりつつて。書べきとしなすんとなり。

抱(だく)〳〵さゝみ〳〵る 日 さゝ〳〵みるとはかるなり。

おいん〳〵うまぐる〳〵ゐしつ 北九の訓〳〵 乗(のり)おもに従(したが)のおく〳〵。

ゐるがをうる〳〵 日 下旬。今ゐる人ハ父(ちゝ)のもと〳〵海(うみ)を隔(へだ)てゐるものをさし。

もゝ〳〵もおが〳〵ぞ〳〵 このもゝ〳〵ぞ〳〵のごとし。

いはまくもゆゝしきかも 北古の訓〳〵 指(さゝ)をさゝと。考(かんがへ)べし。

うごまさ紀の歌

みやうがつ妙糸 二のひ〳〵 花(はな)を花(はな)緒(を)とつらぬくべし。河海抄いと。机(つくゑ)多〳〵糸

を。名香妙糸(みやうがつみいと)といふべきふわ〳〵べ。

かゝるともへる 日 へるハ。糸(いと)を綴(つゞ)りてゐるなり。

ひがおもうごをべう〳〵 日 おもを。伊勢集(いせしう)の組出(くみだし)を引(ひ)て。考(かんがへ)ふべし。

ゐるをきさゝぐふう〳〵 日 おさきもさゝぐも引(ひき)をも。糸(いと)の緒(を)そいふ組(くみ)。

ゐをのぶ〳〵ゐるかりるを 三のひ〳〵 をハ。とを借(かる)ものべし。

ゐまさやふおく〳〵おびくもう〳〵 五ひら〳〵 姉(あね)の申(もう)のまゝ。ふぐ〳〵くふお

ぐ〳〵ゐる。さら〳〵ぐちて。親(おや)るぐのやうふいそつつひゐんと。まゐふ

乃(の)おとうとをあがせうし。 ほゞともくるがてり。 ほゞ

いふおが〳〵おきつるかうのう〳〵 日 いふと法(ほう)切べし。ゐつゞれがてふをいふ

のそぞ。さてこれを。姉(あね)ふの。おく〳〵人(ひと)とおが〳〵 抱(オキ)つるおやいごといふる

なり。 ほ。古(ふる)ふのおが〳〵おきて〳〵やうふまあるハゐるがてり。

おとよがり 二のひ〳〵 ふふ思ハ女(をな)るをも。といつる法(ほう)おし〳〵ごてり。

さやうふおゐもてう〳〵 七のひ〳〵 着(き)ふの。ゐ〳〵中(なか)をのぞきて。さやうふおゐもてう〳〵

もけて。や給ひ。ゆるしともの。あべきやうふ。婦ふのおやをやるといふ。
をる況。おもむけてを。婦ふへうをして解きるるふ。ごろ。
もてる私を給ひぐるなんと　十廿もり　ぐるり給んハ。私ふ汨事。かてそ
給ひとど。夫婦のかるひるし給へるし。とふべられぞし。注ごろり。
おそろしともぐるてて　十七のひる　乗ら時るおも。んきうをめふしと
いつるハるがつり。
ふ心置給うる　十七のひる　そりて行つきるいふふ。髪(トリ)をこめるり。そり行
注そるハおり注給ること汨し。
行るるる給つるむ　十九のる　廿下ふ。とるがせだ。ねどいふ汨の差るる給んん。
おめきる　ふてハ文そのりを。

廿日もごべんおるくて　日　廿汨。此日ふなりてけるのおるく咲れば。
下ふ。まぐまひび異き注ぐ給ひ給ばるも行ま八月の四し。御まだ七
月をまるんも。志づんるくてといふをや。おしいぐふ咲。
おるふ出ていいるぞハるる　十のひる　ろふぐ。おるくといもむりハ御うばく。
差ふのうをむうぬをおるりし。まれだ。ろふぐ。さとハいうぐして。中ふを
行をせん。給せバ差ふの。中ふふ。ふひいうるべしと。思ひうまへふし。細流
の説をいるるきるびし。まちる人のおんとうをバそかいふ思しまや。
るべき人のおをぞ　十七のる　そとかくとかつうひふ父母おをぬよ
ふるりてといふこと。注。おをぞといふれをぞ。御答る人おいせ
ぎてといるんハ。給るし。

いふまでもあるまじ。 ㊀ 婦人の。氣ばたらきおぼさむ。

ぎょふんもまたざりろうそく ㊁ こよひのみ 蓋ふかせ。ちらづき給ふべきまでのこころをかまへてもたざりろうそくふかんゆまじ。 傍注ふかんことし。

例のおうなうなり ㊂ さるにか婦人そひぶしにおひしのごとく。例の寢ずはなくて。夢をおぼしつづけ給ふよし。 注ふかんことし。

行うこれをうなり ㊃ 行うは。上の祖をとがめて。行うは。外（ホカ）のまおはうべし。これはうなりの次しといふこと。 行うすぞといふほはきこまごまり。

ひとりふうなり ㊄ 實ずはなうわなりやうふも實ゆ。

きてがうなりおうなりおおきし ㊅ おうなりはおぼしを誤まるし。さてこは若き女の従よろし。古えの字を捨ふれんふも姫をさきちをばさてがうなりと記ねか。

おぼしなつるよしし。 若きの分の注いうなりきをうてうし。

いふまでもあるまじ ㊀ こと也も氣（カ）ばたらきおぼさむ。氣ながうなりおぼさむし。

行うこれをうなり ㊃ 行うは。上の祖をとがめて。行うは。外（ホカ）のまおはうべし。これはうなりの次しといふこと。湖月抄説のごとし。

かぐうなりおうなり ㊄ 實ずはなうわなりやうふも實ゆ。

きてがうなりおうなりおおきし ㊅ おうなりはおぼしを誤まるし。さてこは若き女の従よろし。古えの字を捨ふれんふも姫をさきちをばさてがうなりと記ねか。

ぎょふんもまたざりろうそく ㊁ こよひのみ 蓋ふかせ。ちらづき給ふべきまでのこころをかまへてもたざりろうそくふかんゆまじ。 傍注ふかんことし。

例のおうなうなり ㊂ さるにか婦人そひぶしにおひしのごとく。例の寢ずはなくて。夢をおぼしつづけ給ふよし。 注ふかんことし。

行うこれをうなり ㊃ 行うは。上の祖をとがめて。行うは。外（ホカ）のまおはうべし。これはうなりの次しといふこと。 行うすぞといふほはきこまごまり。

へそ。今もづ〳〵仕てみちびき給ふまでくやとがくひのふし。

いつおりのるとうはえゝ（此八のう）とのゝ二字為るおるべし。又

おゝそかわ話りんそ。おゝいうわゝしんなどきべき話し。こゝ八世の人の。

おゝそる空もきべく。又婦ろ。みづゝおゝそもきべし。づゞ

おそと。話りんといふ詞そかなるべし。但ゝ旨まも行とうそくいるハまづゝし。

おろうなゝぬえゝ（四十ぢ）葦の詞かて。旨まろ。なるうおるそ。へく。字治へ

おそせゝる説。おろう好ゝぬ仕なそのはんぶゞよゝ。ゝぬぶまゝる。

但ゝごろ。葦ろんの。旨まへのんぶじきそハ仕ろゝごゝとうはのまかるまで。

旨まの字治へおゝそゝる説。まづくへとハ。ゝぬぶまゝる付れだし。

おひつぎかき話ひて（四十五ぢ）きもど。悟るべし。追徒し。えゝのくぐわを追て。

ぬぐまふ。つぐきそてかくゝ仕うつ

ふ仕ゝよおろうをえゝ（四）上旨ハ。婦ろまふ申まふ。実事ハなろゝゝうバ。

実ふ旨ゝうとハいふ説なそろゝとし。下旨ハ。紐をどし二和ゝとふそひぬ

ゝハ志話ひゝゝまを旨ハかゞゝぶりハかくゝまで記ふもうつぐゝし。但ふの

仕りゝ。なきゝこおり。

人ろをでろづゝりきみやづくへ（四十ろぢ）字治への縁まべのるし。まて

そのろゝふそ。ろうて申まふるゞの動為をかゝぶりおんうゝし。

かゝおいろゝゐびおりつる（四十四ぢ）でろへくかくゝいふろ。ごまでハ旨まの。字治のる仕。涼くおゞそういふぐゞし。仕ふを引ろんゝそふおゝそゝふ仕ゝりての話つる話し。実ろ

おなじれさるがまにてそハ（四十七のウ）もろひ今来字治へおくをぞそも。
もやよわさるがまのふことおもまバ。ほじれさるがまバおりませといふし。
俗の流り。一すきく流くと。二すきくと。流さいくきむがてし。俗の趣に
むがくもくりてねくふを（四十九のウ）をハ。例のとを倣まるし。
いつきさるくむ姫さもうく（五十のウ）尚中ふやむてねきれの姫ろ乃。
うぢりかくもそやされ。いつきさるまくまさ
ろそつゞし。ことおどのすおるべくそし。思ひまくおるがさまのうくと
ハ。さやうふいつき居る姫ろハ。こおくよりおも思ひまくそいとくくと
るくぞくつふし。曲流をぞふこまに成。女一ろの作りくて（十一）説まるを。

ヨが方さまといふを。白ろの系とんおらまるよりの倣し。ヨが方さるとハ。
うお姫ろをるくのこおくのといふことふてを。又姫ろを姫ろとハいへ
系てなきをや。
ろ路をぐおくく（五十二おもて）二のヨ。ヨがくいつるハ白ろハしもしぐとハのさ
まへぐ。いつぐおくん。ろくまなろおを。系ハそまを粉ろふるまを聖べし。
系ろつまてハいとおふうく（五十二のウ）系ふつまてハいとおふまこハ系
のやむてねき系ろくべくハ。字治ろハよろがまびくき系ちれバ。
いふかくづきまるそも。限をて。いとおふおぐいふぐりふいえあ
ら孫ぐも。ム系のまふおふおりせてハ。いとふうくづきまおをいふし。
姫ぶひくまふるわぐまぐ（五十三おもて）ろくし。一本ふまぐとまる。おくび。

うたゝ一人もろ〳〵 同 岩垣とハ岩のおのづ〳〵垣のめぐりたるをいふ。石を垣のやうにつみ〳〵 六十三のひら 旬ある句のさまのごとし。ほとゝぎす。

かゝるそかの中納言もろ〳〵 同 中ごへ旬ある句のさまハ、中ごのかたちんぎんなどのよう〳〵なるやうなるを、葛などのはやり〳〵ものゝ名のおもしろきをつゞく。婦人のおぎなり。

うちつゞきそゝ稼ぐをこがねかな 六十六のひら 伊勢物語の心を味をいひとりて、うつ〳〵ねくもの心とハ、俗のかせ〳〵ぬひ〳〵へつゝるゝをいひ、ちゝこゝし。

和うたもしんやうきをふう〳〵 六十九のひら 二条ごへうたもやはり詠あし。ほとゝぎす。

ふうりうをてゝおもふ心を詠つゞるをまづ字治へなり詠あし。ほとゝぎす。

ゆう〳〵げおもとど 五十九のひら 蓮の心の、慈悲にてぐ〳〵ぶつをうづ〳〵

ゆふをゆう〳〵ぎなきこゝろおもとおぼさゝし。かゝるをいふハ、わきまへのうたゝし。

う梅こそそゝ 六十二のひら 梅ハ、葉よりさく〳〵ぬきいでゝ、ちりかゝるまでをいふ。

春ハ花。秋ハ紅葉にて、さく〳〵 同 指出ぶかハ、八重の秋うを詠つゞるよせうよう。

ふそいづく〳〵ふり出どハいはぞし。いづこよりといふハ、什物のうぎハかく

だりをうう統だハ、ちく〳〵よりハ、え立てゆき詠ひ〳〵ぞのさゝし。

はんのうつろひやすきハ　六十九のうら　きハさの條し。

うながむるハうら　七十のひら　なごむるところハ、あるも字法も、同じきをもて、

へだてハおきけん。時あればそれぞれに、おのづからなることをうるこゝろぞし。

物ごとに法をきする　八十二のひら　或おかゝ物の事おぢ、をもてなすべし。

ふるまひもおのづからむをぢも法をぞ　八十七のひら　こゝろにほみおかなくてもべし。

うきしかることをうら　九十三のおら　招きおぢごと。法句ハ、上文かゝりたるきこと

とを繋ぎ、ものもうし、とうるを更てるべし。これむき、ものむ

ろ歩し、ひるとうる、こゝろを教よまむし、句文の繋り法をいつり。

ゆくいつぶせうら　同　かくくんでてなうで、ふとをもよみうをのふバうり返くひひろ

なご〳〵おへぐそるを、中〳〵いつもし。

うおゝ未をうら　同　指さおぢおぢ、

まりていうふうら　同　和流のおぢ〳〵。

法もおきおうら　九十のひら　おぢうる法のごと〳〵。

二條法のおゝ乃對う　九十五のおら　一本ゝ云條法のとうり、今品ゝ本法の

老ゝ本ゝうつり語つるうを法、まう〳〵二條法るれども、こゝ此次の文を

もそこをバ、こをハ云条法ゝかもるべきう、ま九ハ、時〳〵もあひふべくと

いつるこ、二条法ハ、句文のつゞのえうれバし、又女一

えの法方ゝう〳〵も、二条法

云條法るゝバ、次のまゝ、中えハ、云條法へ〳〵のゝうひしうどと、ろう〳〵

のなかに、二条河原に市をたてゝ、そのよし御ふれ出されしかば、二条河原のみちのほとりは、狂言ばかりの人だかりにて、

お蔵出し

うつゝをぬかすとは、この事なるべし。はをとるとんぬけとは、のことなり。みのうへ　人のうへにて、そしりわらふこと。

いそせもり　指さかし。花をかいそせもりと、云ひかけたる、いとをかしきことなり。考へ出したるまゝかいつけて、筆のすさびを見るに、おもしろきことかぎりなし。

かゝるよし、いひ又一なんいそせもりとよめるよしを、云ひふらしてゆきけるを、聞て、云ひかけたるいとをかしきことなり。

もゝとせのあまつをとめ　百年の天女の舞を、見たるやうにおもふ、の意。

伊行釋云、此二首、按之此兩首、從今のんふ叶ふ　ともとうたふ、考へもしつべし。

をどりをばうたひ　十ばかり　江海を打まはる、今をどりをばうたひ、とは、さやうのかたをいへるにや。

○十五

○十九

ゑとのこゝろ。まの敏と近き事へうつり行らんハ。ものもしく〳〵しれしきことゝもいふよしゝ。みぐるしき事ハいふ〳〵〳〵ゑをもて。ゑひまぎれぬよしゝ。ほゞと。をきどうおろ〳〵ぞ。

ゑゐる人もう〳〵 土のひら〳〵ゐる人をゝ。中ゑみづ〳〵めすゝ。二の日。花の風ふみぐる〳〵ふよせて。そぐ〳〵〳〵ぐんのまゝびよふゝゝし。ゐる人もつゐるまじ〳〵といひをこるゆゑわ〳〵び。

ゑ神事也〳〵う〳〵 日 おのゞをゝへる岩川 常雄ういま〳〵此ゑハ。ゑの。ゑふんを。をゞめすゝ。ふよあるふをうつゝび。中ゑの。婦ゑめすゝ沢おゞ〳〵。又ゑ活の里を別をんこゝ沢。こゝ沢うく〳〵おゞせるを。おぐさ。ゑんこゝめふよあれるゝ。さて神事ハ婦ゑ。梅ハ中ゑをもとゝへるふて婦ゑの大切ふおゞせ〳〵。ほゞ井村中ゑといふをゝ。二三の日ハ婦ゑハふをゑひ〳〵ふゞも。中ゑハ。をゝ〳〵ふうゝび。もひう〳〵ふて。おう〳〵まをよふなり。

ゑの日ハ。此ゑ糸うつりおふるすゝ。二三の日より。ゑのゑへ川つゞきをんいれをゝ〳〵。結日ハうつり結をんゑ糸のやどる。伺うハ。け里ふちく〳〵ることゝゐるゝ。いつるふて。やをやをもをゝゝ。一そもをハ婦ゑのたゆふゑすひ〳〵中ゑのゝをゝ〳〵ふうゝ〳〵ぬはまふて。うつると結ふうれで。糸もゑどゝも。け字ゐの里ふ異おるこをやをゐるゝ。ごぐ日ゞ〳〵おぐせ〳〵。おぐさをんのつるちう。次の初うゝ。又も狩うやうふをゝなんうゝいつもゝをゝて。ゝぬへぬ候をゝのこひうゝてゝいつもゝ。ゑうれ〳〵きんをバからゝていそゞび。中ゑのんをゝおぐさをんうゝ。といつるよろ〳〵。ことふて。やどや

おまへの楫もを後へぶ〜ろ〜ろ〜　十九のう〜　楫を露のへぶる波ぶつま

○あけをろ〜九

ろかはうそこと　ろかはうそこをねぎ。

さゑうつりてろ〜　日　白玉か迫てうつりて。今かく〜ろふ玉ども。も一後ふん捨ら

まそ。ろ玉ぬきさゑうつりて又ゆ後へろ〜ろ〜ろやうん。まつひふいうねろんと。ろ

飯をゆのべる後し。

う志ろるやろ〜　十七のう〜　河の海抄万葉の引哥。ねがてし。指さふ

いるがおろ〜。ゆ〜きろるべし。但〜志ろてるやの後ハ指さもねがてし

さそおろてるやふねのこぶうろ。と後きつふことハ例もろるりもなき

ろねるを。こまハ紫式部。ふねのへぶつろ〜ろ〜。思ひまべる後る後べし。

おまへの楫もを後へぶ〜ろ〜ろ〜　十九のう〜　楫を露のへぶる波ぶつま

かの岩そいつるあとハ何をどろ〜

う身ゆなぎんろ〜　日　こまハ今ハ舟へのこゑまハりて。ろぶ舟の引を

ゑひろ〜別ふねとりてごふよろ〜後つろ。

あ志ろ〜ろ〜　十八のう〜　三の白あと好んやハのことし古今集の哥ふ

ろとこふ〜もつろむものねきやろ〜ろぶ〜。同し様のろれやし。

ろねがせろとばろ〜　十九のう〜　あの月もろ〜ねまび。ねも今ハ星河ねて

ゆまぶとも。ねまいうねろん。ねふろむ〜ろび〜て。又山里ふうつるやう

かろ〜もかへろ〜きろ後　十二のう〜　下文ふ。そぎそろ〜ろまバ。ろ〜ひの後。さろ

うつまろおとつろまし。ちぎまを危ねろ〜。後ちきをや。

かの岩そいつるあとハ何をどろ〜　十三のう〜　湖月のなの方ハ。ゆ〜ぐ〜。

う身ゆなぎんろ〜　日　こまハ今ハ舟へのこゑまハりて。ろぶ舟の引を

ゑひろ〜別ふねとりてごふよろ〜後つろ。

あ志ろ〜ろ〜　十八のう〜　三の白あと好んやハのことし古今集の哥ふ

ろとこふ〜もつろむものねきやろ〜ろぶ〜。同し様のろれやし。

ろねがせろとばろ〜　十九のう〜　あの月もろ〜ねまび。ねも今ハ星河ねて

ゆまぶとも。ねまいうねろん。ねふろむ〜ろび〜て。又山里ふうつるやう

ても。字治のくすを思いでゝ。さしてゆくこゝちして。かつまゝおもひ〳〵行るこゝおもひ〳〵行るとのゝまゝあし。上よ。茅うりまるこゝちをとひ下に。ぶおもせまし〳〵ばゝいつるゝをもてもてまるべし。傍注いつきをがてゝし。

ひぐらしの名ハをこがまし〳〵きゝ〳〵 此のひ〳〵 茅ぶき〳〵申ゑと。つゞまりもてゆく〳〵

名りんハ人の名りんそゝろも。ゑ〳〵こゝろハをこがましくやかりんと思へども。

とのゝまゝふし。傍注よゝうり。茅ぶきをうくがひのふ名を次の文うけまて。こゝハ松よハあ〳〵べ。

宿木巻

き〳〵おもうろひもそ〳〵 此のもの〳〵 下のてもゞ 注ムべきこと指きふ。らそ

〳〵いつるがごと〳〵。うろひえてくゝハ。仝くよ〳〵うろひもるをいふし。

なふをうハおどの給いまる 云のひ〳〵 おもとの〳〵ふし。茅ぶきのふ。ちりがくきまし。

ましがく〳〵。傍注ハいちひごとし。

まべくあるそゝ 月 あものをゑをうゝをべき物をゞども。やづくあるそし。

傍注 茅ふきのふおとゝの葉。うろひもそ〳〵。さうり物るといふこと也し。うろひまるふくの又一名りし。

やがてのとゝゝえ給まし〳〵ハ 十のひ〳〵 或おふ。むう〳〵よりけごく〳〵う

て。そのまゝ山里ふゝえこもりてわらんよりハゑ。といふよりし。

潮月作説傍注ひがごとし。

名まゞ紀まごき〳〵ふ名也 十云のもの〳〵 受引うをべき物し。

ようべいうぐハ作るべうもう〳〵　物うべいう動る方ふ居ようんとおぐ

〳〵えさそ〳〵ふし。さて蒸ふ乃ふふへふ。ふがやう動る人などふお

ゑるやさそ那ハ小おもて粉ふ。ふし。汁ふへ。下上うちふしてんねべし。

ふひうべうぬるんもこふなうて　廿二のう　山葉ふ位うり〳〵ほどハ。芽と

ふひうべう。芽ちうきよりハ位うふも。思ひぐうり〳〵。今芽一ふ出

てぞ。かの心葉ちそよかうし〳〵ふを。志るるとし。細流の後ハ。ひうくう

〳〵るべし。

ぐふ汁芽そ　廿九のう　ぐふとハ。旬ふ乃。後の芽を。ぐり。ぬきうきそし。

ぬき〳〵きた心ふそ〳〵ぬべうれど　四　だハどの後し。だまでハ。ふそ。

ふをふ。ぬ〳〵う〳〵　廿二のう　下旬。旬ふのいうふおきふるて。ふり後ひ〳〵

ねぐりなう〳〵んと。那葉の旬ふの位んをおぐつうおくおぐせるし。

ひうりふねう〳〵ぬ後ひて　廿二のう　後ひてを。指きふ。後ふでうふへ見ど。

ふ見ハひうりふ葉ぐ見〳〵なう〳〵後ひてのふおるべし。

ふやし紀ふも又ぐふ禄ふねう見乃ふと　廿古のう　指きふ。六帖青栗。秋山のふ

をうけ芽乃ほうぎた悔し〳〵ふとぐふ称をのぞおく。ぐふというる

栗。此ふ那ふ光り。

那ふいふうし紀ふりうふと　廿八のう　ふもど術るべし。

氣てそさきふ。ねぐ　廿九のう　指きふ。六帖。人よりハ氣てそさ紀ふうく。

細流ふ汁ふもど那人ふれなど引ふうハ後しとうり。汁ふ氣うふ。

即云牡丹ともいふ。和名一名ふかみ草ともいふ
細流りハ本出をもとめ流るなどを云ふ
うみなもやうう 春より初
そぐ下(シタ)ゆく色ある物也。枝葉ともそふるもの
梅もそぐりハりのそれ〳〵枝りのそれ〳〵白きを考ふべし。これハ表ハあで
りあて。下ふことばりのそれ〳〵ふよるてし。
そぐろさむく花の雪をもて つつそびて 春花のひら〳〵ニづふ花のさまをもて
あそびものふやどのすすきそぐぶ。そぐろをにやうふおぎそよう〳〵あて。岩人の。
ふいつれをぞ風。むぎふ赤り結ハなこ成つるし。そんふとよを切て。
そぐろさむく花の雪をもつぶきそんねべし。

えづ〳〵うゆるよ初花をもて 日ぐ。ハどの湯り。花色細流などの出院のご
と〳〵あて八。花色をもとぐ〳〵つゆ〳〵でハさハ成ぐ〳〵。もし本のおく〳〵
ぐ。旬ぎの。中ふのほさめるハ。まやうゆるよまで。つつひめふを。そびて
らし〳〵つゆり初るほよと。旬ぎの出乳母ハそ〳〵をなるもそくふるべし。
花色ハ。赤色より赤〳〵な出乳母などハ。旬ぎの出後見の方。ふつう初るやうめ。
そ〳〵をもやうしと云。

いとゞしく人ふり〳〵やとぞ 年ふれ〳〵 什芸ふんハ。ふかりもおとり結りぞ。
人なかづつれる。老人ふそ
ぐハ。むげふ赤り結ハぞ。
ふよるべき出男ふ。宮居の出ふを。ふて。さる
ふをなふひふりて。深く人ふり〳〵とつふ

みそしのちの　日　孟津の流よろしきやうか笑ひを　かの流
のぶくなくバみそぎ川　などいふべきか　みそし川といふハ猶
恋をぐせをやわらん　恋せでハ恋ハやわらぬ　妙恋のさえいふ
なる　妙恋のさえいふもの　ひやらくとのふし
細流などふ　佛のそよハをきくとハ　恋をぐとハ
佛のそよハ　ねふべきなり　いそぐをきくとハ
ふくともあらじと　日　ふふ人の形を　ふふしほる　彫刻せるもの
こゝての後に海うし引出　古物語手ひろ　ふべし
花ぬすびとせるもの　六十二のひ　此ものがたり
ひとれふぐひ　ふりとハ　そぐめかなどハ　何のハ

うりつくりきとハ　恋をいつくりていふも　ほぞとゑでこし
も称をおさへてるゝ　年八乃もの　或物かふふことをおしこめる胸ハ
きものをといふ　下ゐもとつるよろし　指きの袋も紐也
ぎふぞゝつくやをかしも　日　もみぢハうくといつて　ぶぞくいつり
名ハ恋ふの下のゐと　冊ふ地よりいふし
ぐりぐふつるねど　六十九もの　何の海ふ云ぬ　恋しきのかぎりぐふつるく
とつり　今恋ふれ　此ものを備しふきハ　字治の姫君の恋しき乃
限ぶきて　今ハ恋ふなど　ふぐ　今中ふもつくきぬ　ふそかくハ　ぶげう
ぶくまく　抱を　かく中ふの法きぬ　涼く　歌くも　妙ふの恋しさ
のまゝく　後ぐきよりもそとし

もつびろんくらひしうごも。今八百
人のかいかもつくびん　六十五のひら　人のくちぜんはべし。人とハ海毎ニ
をいふ。さ人のさまの。ごがいのざうり
さまやうのハかりで。妙ニふかい物ぞハのさま。
いくかしこなどまゐてう　日本丁を八ざつくハかしこなれど。いく老
ていとおそろしく飛ふものゝさ男かねたバ。虫ふくてをもんハまりて
かしこなどバつまくてかんとよれし。
井ごろをみうさへう　七十五のひら　こと八陸奥ふ五しほどの男ニ
ふべし。上下。名陸ふなりて後をおとゝ笑ばし。とゐたバし。
ものいふがをとよめ　日　或おか中ニの女房ふ名ゐりのさまるべし。

かくほおせるなく　日　なの下ふんを為きし。なんとし。
こゝふふるど　七十三のうら　細流のごくさ
ぼくさねとゐたバ蔦ゐ中の一種の名ゐるべし。下ふ句ニの組ふおりき
ニやどり木くう　日　神名。むくやどりと称ふことふありきニ
ほふ。一生涯よりぞ後うくふ
ニほふいでぬう　七十七のうら　井ニをとゝへるし。
うつろひをど　日　細流ふ業ふさるゐるしとゐたバそでといふ組ふ
名をど。こゐをべくゐ法ふもしるが方。
びをおもをへ生ハ　七十五のひら　ゐ下ふ古ハをど見てをんをくいふき
をもちてんはべし。

寝殿の西おもてと、北会通堂とを、うつり給ふべき事定まりぬ。これば西おもてふきしとゝのふべし。

浄福寺殿堂ばわりひかふる　日

この八寝殿の西おもてと、北会通堂との間ゝ、廊をつゞきて造立てゝ、つゞき孫廂いつゝ造しつゝ、北廂をつゞきて造立てゝ、西おもてへうつろひ給ふべし。また母屋を、北会通堂へ、便宜乃方ばりを以てわかつ。また孫廂ハ会通堂ハいつゝそなへまるべきなり。おなじ孫廂ぞ

寝殿ばわりひかふる　六十七のゝ

孔がごとく、他先ふるまふ詞をバ、狭少しとハいふなり。

こゝろふかゝらんまゝにゝ　七十八のゝ

こゝろとハ母屋のまんなかの方をいふし。侍ふるこゝろぐ二条院とんばるハゞなり。

ゆかり二条院ゝ系統ふゝ八、北会通堂も多く給ふとハ上ばかりをや。

やごと系望給ふ　日　寝殿二条院ゝまゝ給ふゝ母屋の北方ばかりまゝにゝ給ふゝ。

ゝん殿をバ、皆のこさゞ女二宮へゆづり給ふとゝ　八十三八のゝ

づゝんと、母屋をのゝ西へうつろひをバ、寝殿の西の間の、西おもてのうつろひをふまへて、母屋をバ、その寝殿の西の方へうつろせ給ふ。

上ハ夕霧の詞。此下ハ地の詞なる。さる心なるべし。
おとゞしきまし殿 八十九のひら 殿の字。との と訓べし。おほくハよみへつれど。非
よハ候字まで。其のもとま。
例乃法ふと 九十二のひら さる私ならで尓やどり給ひけれバ今あらためさ
承和りもゆるしで。例乃法事始まれバ絹々ハえぢ給りんといふなし。上文う。
ちじ光もこふかんふとといひ。下にも。此二月になりん。えつきまでぬとよ
つふらくと見ゆる。
又ゆうしくなりつらく 九十五のひら 二たびのと移らバいく夜もく。のぞ
きゑなふし。つくといひ。立よわくといへるふ。ちまと見ゆる。
此殿の法りる小もうく 九十六のひら 此せうそこハ。弁の尼が。薫君に対面
しもらん。と移らへ給ふらんとのせうそこし。下に。君もやまうち出で。浄そ
おどき給ひてぞうらしとゆふぞ。御ぞ。気のよしと見ゆる。
宮かみる給ふらく 九十九のひら 宮も気きふりの名とよと給ふるハ。秋の婦
君り物るまふおりてたるべし。さて。君もとよるし。

東屋巻

母ふ人ぞしらるハ 六乃ひら 母ふ人たる。父をいふ。常陸が子共ハ。母のと移ら
ぞ。父も具しゐるらし。
あるよりおり給へりと 七のひら あり給ひハ。あり給りといふんがよし。
あり中あらし 同 うかゞひやせしといふんがよし。傳は然がよし。
宮川らひく 同 さべく。此詞ハ。かとりへ許しやう給まし。此下にふと

いやしきも　同　漢文より。苟、字ばかりも。ほの字。何しつくひばかりも。などいふ如し。

どと。こゝは大ごと。ばかりの。かるくいふ詞。

さるにてはよふ毎日きて　十八のひ〳〵　されど。さぞれを得ざる。

えが〳〵ふきやう　十九のひ〳〵　だにだに。

をいし〳〵どもなどやう　廿二のひ〳〵　をいし〳〵は家具し。日傭取などの。

ふ中ふ。あるひどもなどが。けしからぬするどやうし。　ほふきいし〳〵を。

いへるで。話そこは。后条ふやうをいへ。祝言ふやうをいつる例なり。

又うちなどの中にを。供などの伝るも。といつるもがごとし。後世ふ。

いふ。後ふこそ。雅ふこと。なきふ。行の仕をう仕ん。

とだにうくつる詞。ほのぼのとだにうくつる詞。

つてびても　十一のひ〳〵　つてもの。

いふことなり。

つへどもして　十三のひ〳〵　いのち。

うちふくもふもふ　十三のひ〳〵　もてびも。信ふ。そこふ。

やくせどくいふことそ。うちふくもふ。

しうこふ。ふかせんといふし。

ちちふくもふもひとうびて　十四のひ〳〵　うちふ。興ふ。

ふやうにて。ひとうびし。どをてふをそ〳〵うふ。信し。

えう〳〵ぜさせ給ふ　十五のひ〳〵　えうどとふ。孫がひもともうさし。

きようふふかひしより　六三のひ〜　或抄云、白天小中云のお意しるし。
かむのきこめうこころより　六四のひ〜　一本云、かのきこめうこころより〜そも
よろしかるべし。奇陸もの成、かんのきこころといふうごくおろ。
めるびしるし　六五めり〜　る。ハ。の語し、け取つ四ふおろし。
えなわうこびるうふりをバうる　閃　指示ふうるをとハさてもうるをし。
いつふかてり生地、文まそし　六六ひ〜　移だてそうる形どいふ取のわとと、一つ何
けわふハ狂き何かて、ふ〜
のそふふきし、ことを以てろるべきし。
うれしなれう　六七めり〜　みちの〜めうるべし。うれそひの、といつふ
もようしきり、奇陸のるハ、決う　ひくん心のそしといへバそれなな〜

べくも、まず陸奥をいつるおそしろし。
うハふそいひるさで　六九の条〜　蓋云乃、今年を、あらしとの〜夜
そんを、女二ろのはうくさる方かつまて、おやをふそ〜る祭うう
そふそのくるハ、月ことし。
いくうとそやう形るう〜　六一の条〜　やう形る事、何切て、蓋云のくろ
うふりる心、うれうきやう形る世界、ろの法ふりうくのそし。
仏ハまこと〜終ひろと　六二乃条〜　まそ〜話とハまこのろ形のろ毎へ
まといふこと心、そうごくいふをそうごくをといふほど。
なきろをそうでバ　六四あのひ〜　うる終をまそれをとおぎさバさやうう
なきろをバそそごして、くでふ志を話へといつ事、引ふめ下のまし。

おぞき人まで　我がひ〳〵　おきふ
右近がひつるをすこしきもう〳〵　同
ゆうべ、又はうこんをすこしきかま
ふよつて、ゑひくいおほし、女房ごちのと
大夫そくびいまわんう〳〵　堅田ひ〳〵で今朝んで句を切てんたべ〳〵、
つるそふとハけん使のこゝろ
を実に大夫ハそ今ハ事を引物
大まも多のつよかるしとハ
ようそとうーそとおぐくせ話ハ
さかーらふ改そつるし、そべく

思ひ出すせ話ハ先、そいふふ同じ
きいとおりがり　同　笑ていとおり
けんすゆくぐきーバ　同　招
いふおがもうんと　同　こゑハ
いふおがもうんとおるべし。
かくのこみぐりがうくう〳〵　堅十三のう〳〵　白玉乃、かくのこみぐりがり
くおをるやうな人そ、いふ
の人のうへをいつるしそて
なる成ハ善悪ハやうふそちらバ、ふやそ記くも
そんそそ、らべものふまぐいつ信し。

おもふことそひやるく　同　中君はじめより浮舟の君のうへをばいかゞ
おぼさん此旬あのうを盖君のおぼさんことゆいつゝくおぼさる
中君のうひうふるすゆゑ又そひうる人といふてふて人を浮舟君に
おもひつゝよびふくうる　同吉のひ
くとゆへをそえべし　湖月本にはかゝるをかゝるといふ類
まりそうまるおとうふいふへくうる
いくちの松うもやう　同十七のひ　指を説給べし
ふるぐ〳〵かつび　同九のひ　ふく〳〵ふるきハ昔ある人をく
をそ、そのうち
行すゆひかうぞとう　同十二のひ　今かゝの心ようをうをそ、の心ハ何

うをうよまつん、そうぐ〳〵ふきことハかうじとゆひおとうる説ぐ〳〵ことが
ふいうぐ〳〵ふうをよう
う　同　まよハねう　萩そハみぐるねとゝよへる三ハ
浮舟君ふ何のゐ細事なきふとゆへ昔ハ浮舟君ふおそぐ
今そう〳〵　同十三のひ　ねふの心ふ浮舟君ふおそぐ
まうう〳〵ゆひ給ふ八文のゆるゐしく、ゆひうる心うれぐ、盖君ふ
ゐ給ふ女二文う、又一ゆうなの名ゆ〳〵ねをいう、今をうう〳〵ゆいつる
ゆきをうり、又下の文うそうもうべし
舟君ふ〳〵ゆ　同十四のひ　うまつ〳〵考ふいかゝゆ〳〵ゆとうきハ先て、字〳〵湯ふる如心、そこの
らつ〳〵考ふいかゝゆ〳〵ゆとうきんをいゝ、かりをたゞ

と云るなるべし。いふやうにまれぞとそゞろ泪し。女の
まゝそはもげかなしくなるを注ぐるはいみじき法(レフゴト)なし。
なかくしこそをも 日 例の実方。業平朝臣が羊下駄の頃。まことふ此
ふかくまさやうふんなるほどもしばゝふぞや
みゞらやもかこふ公めそね 拾遺の歌 古今集の恋の部に花もちくさ
まそこぶる人のんうつろやをぬといふをは指のてふを八
てこぶらかこふ出給へうとふまし。
ちきほぶてそ 五十七のくに てそ切る法し。ちうたかぶてそ仮
まといふことなり。
いがしめん 日 しめんは。姥を。老る女を引ていふ。老る女

乃至男子。此抱法のごとく。女人の媒をもあらく者を。伊勢
しめんといひうつるなるべし。 五十八のくに
ぬるびるえしめ 日 ぬるびるえしめは。
いふべきふわゞび。さるにバこと八ざるを。しるし。法ある
庚乃志女中ふり。おるびざるをえうてし。
かの夜てそ 六十九のくに 日 常陸が家のうし。此家ふつうの者の住れバ。
うやまひ飯といつりをきとゝぬるのりをして 六十一のくに おのくその妻る物のみをよ
びつゆくをいふ。
よもぎむぐら 日 きたなき家のこと。もと此法をぶや。

かゝることもあるべきてい〳〵 二十二乃ウ〳〵 こゝうあてハいまゞで字治へもいゞ
こゝへも舟ふものゝなそなそろし。それを上の舟が沼ふこゝゝハえ系
らじといつても字治へもることハもう〳〵ざれだし。又下ふちう沉るどふやと思へ
ども〳〵といつてもふべし。かゝことハ今ゆく〳〵ありといふことあて。いづことハ
のゝ名そざるし。

廿日朝うう〳〵 日 廿依うよりてえもバ。上の引へぞてうもバのだハど。の
誤うや。又けそ也。うそ地なれだ。日朝のもう〳〵ようあて。それをといつう
おつてハもう〳〵う〳〵 細流のおとう〳〵。おといふ依うう〳〵。
うちまゞもてぞ 六十五のウ〳〵 まゞもとるふぞ。ともべきそうし。

浮舟巻

のゞをさるもとるれん 四のウ〳〵 浮舟ふ自ふおもうの出ある。下がまへふつふし。
もう〳〵いふ名なきやう〳〵ふも 日 或おふ。女二ふ文浮舟ふてしといつる物
べし。もう〳〵といつる。言ふのうへふ系てう。友住うう〳〵なり給つふあて
いふそ。もう〳〵といつるふうつふ 五のウ〳〵 うをうりうる志の。古浦をいづこふふふう
立てゐづくひ給つる神 五のウ〳〵
う。ふふふうふをいふふ。
依うもう〳〵ふも 六乃ウ〳〵 えづうへうる人の体への多ふふ。ふ志のうふ
ふて。ふ人のうへを。もうう。おきうといつし。
ふまゞゆりねう〳〵 八のウ〳〵 おきおゞう。まて上の沼ふ。浮〳〵ぬきう人
する枝うとつる。枝を上う。おねふつをううとて。わしうる系う

松のすゑよりもし。神二句いまだ事へなれ
ゑを。杖柵(ツエガリ)をこゝろんとふまじ。
もるおろ〳〵物とうろ〳〵いつるし。
すゝふきがめ〳〵なもどゞも。上うまだ
の年書ろんこゝ(ッ)ゆるし。そゞろ
ろすし。そて松の年篇(カリ)んの
きまて。祝へゑてハもるし。
ゞ又まれとつふてゝも。すゝ
いづ〳〵人ろハう〳〵 十おもひ
が。いづ〳〵いづこがお先ゐるぞ。まんもるるハなし〳〵とふまし。

ほんのどうふう〳〵 十あひ〳〵自ふの。父書古屋めもんの名が通そ名ゐひし〳〵
ろ。も〳〵中名めもんみどく。そもきふ。そ時。さかし〳〵らもる乳母ゞのなうろし〳〵ゐふ。んのどうふ
称んじろし〳〵ゐひし〳〵ゐふ。今ハまひりとやひし。上ふ。書も今とも。祖
称んじろそ。のどうゐる人ろそ。さいそひそえそてふゐ也ろとつるまし。
まそかくいふ。宿舟るふも。んもく。書名ゐひんをえそてふのまし。
なふだかりめもぞ〳〵ふうハ 日 上の宿舟名のつる河をまて。中名の親族
とハもりゐひく。いうばり外ゐる人で。いとう〳〵似ろゐとおぐそし。
おやハそべ〳〵 十云のひ〳〵 歩ふ。ふ
まて。祝あるゐろんとゐりまつるし。

おもの　こゝろ　十七ウ

いひまバ　もやもやまん〳〵　なげて　のごまバぬし。

いごくいふひもべき　十八のウ　そこ〳〵バ　さべきやうもをべきふといふ

ごとし。　おゝバんづよかるべきをとしといつまバ　何うしぐて。

又〳〵もまぢことおもバ　日　和ふべきやうおもバぐ　法ならかおもす

なきごとし。　うをきごすといまバ　緒をのごとくといまでぼごとし。

ふをきごぐおもふあく〳〵　伝統の人　まてごとづる。古道　まて　まもり。日　やう

ふ徳を切て　安〳〵くごとをるバ　別ごおもふぬし　きふ　わるく〳〵　ときごまを。

ほよう〳〵せるし。

ふもなうをる　まおもあやまち　十九乃ウ　此　悪のごまバ　ごがふきごの

やまちをしごとおもあし。　ほゝもぐて。　ふうきバ　こゝろをべきごと

をごゝろをぶかし〳〵し。　思ひ〳〵　ぐるごふをうぐ〳〵べ。

人のをる　和ぐうバ　日　人のをる　ごとくべ。　我が自ごあを入もをて。　みづ〳〵おわやまちおごバ。　ゆごと

うぐむべきやうもなし〳〵と。　せんうごおふをりてふをおぐごもるし。　倩

ほをゝ。　いう〳〵　記ぐごとし。

おようをきてもいふる　日　古道ぐごぐをて　和。　ふし〳〵　いうごふみも

しあぐせるふ。　思ひ乃ふ　おふをれ〳〵　和ごなぐをし。

后世　まよわも伝授　まりて　こ　古のひ〳〵　むつり　実をまをて　ゆ。　なぐバ。

術　ふし。　ゆしまをおふごをべき　伝しまれまぐ。　これより　時方が　何出て。　中まよ

ぶ。白えへん役みて。中えの作せうまう一語を。その伝役の。旬えへ
ヤせるよう一ふて。左の大名もとういふようう。いとかうきとういふまで。その
中えのん詞え。物。かむつうせ話てといふとき八。人ふうまさせ話
そねうくハ。左大たののうねひ一詞を笑せのひて。のうまふん詞のご
うくはて。きべう。ぬどにといふようう八。左右たの詞えとハはしばれバ。
女一八お免ぎ野るうとも。ふるをといふまで。左右たの詞えとも思へど。
う一物うバ。ま下ふ。お。などのうねふとう。などいふ語きくてハ。中えの亜
ふのようおん詞との場るくて。文うのそざれバし。
きそうめ人 なのひ一 はんふ。きん。そうめ人くを。
そうぶうぶとえくう 旧 ふ。そうごとをえいそせふあて。時るみづうう。

むじ正語ぶふといつるうう。
るうう妙法を 旧 るうう妙法
差別しる詞し。
ぶいうでうう世話ひ等を 旧 ぶふとハ。上の中えののうねうう一の語
ふ。人うきうう世話ハおんおろきハうとうるをといつう。
まちぶおるうがおうちもうぶ 旧 旬えの女ひのふうふ。女一義
志のまうう。時。法毎えを。おやふぶうう。そうぶえおく。みづうう。のお
こうちまぶふぶして。法毎えを恨うん。まて恨うう。話うんるを
まえいとうう一くふふ。法
う法をとうう 旧 法をぶふ。狭き世ふハせきぶめうふれバ。ひ救うう

ねをバ別にぶんしていふべきこと。

そゞろありくもの　古七のひゞ　今旬玄の書名のまゝをおそゝろ

かそゞろごとふしてそのまゝ。中玄も同じ。にくゝもあり。

まことふたゝびゝ　日　あもゝ玄俗玄つゝしゝふまうでゝ。

玄いつゞかをべきぞとし。上玄中玄のうち書名のまゝそゞろごとゝのこ

まことふ。もゝそゞろごとふバかりで。玄玄ふとゝいふまで。まことふとバの

こまかし。

まえやうありを　古のひゞ　今旬玄のまゝ。俗そうでゞむべきこと。

やうありといふゝくおがをし。

そゞろありく人をるべそ　日　書名バふうの。もゞふべきものふバ。

ひもかゝまほしぶりしかたし。そゞろありく人といふなし。

ありやなしやをゝ　日　こゝを中玄のそゞろありくおがをゝ。上ふいへどバ。ゝバ中玄の

ふも同じ。ありやなしやといふ句も中玄のまゝでいふべし。

まことバこゝ古バ旬玄の句ゝて玄。中玄の書名ふまことゝ経玄

をゝるすバゝゝありくめなうバ。そしてもんも

そゞろありくもし。まて旬玄の句ゝても。又ゝひ中玄の句ゝても。そゞろ

のト玄。俗玄のまゝるべし。ゝふ補ひ。ゝゝそゞろありくの

まふでふ。同ふうへ。おそゝろごとゝバ。地の句へうる

場なくて。文ゝのそゝび。

きのふのあづつかさを 日 そこはなやまくといふより。ほみの組そて。
そくおどやうふ。昨日のあづつかさを。やしめへとばとつづくまし。
むづとどろつといひまづ〳〵 廿九のひ〳〵 ねのひ〳〵
やりかるよといふまし。
やよおろうる 日 なべての人とハ。ほのかふうりるといふし。この学んとハ。
むづとどろつといふうといり。
夕つうるもかをそ〳〵 廿のひ〳〵 えしく組へておせ〳〵 叶うれで。まづ浮舟
ちかたへおうをべきうかるふさハわるで。まづ佛るどをぐ。行うと
そて。久方ふかりて。浮舟のうへおをせうハ。書ちのう女より。旬ちといこ
よおくていうもうべふのぐやうおるほどをえをする。おざるし。

ふれをうて物うる人をもう〳〵 廿二のひ〳〵 ひひうるとハ。浮舟ちふのをふく
んの事ちかく。飯の人〳〵をバ。ひひもそ。髪のうつるべくおおをといふし。
湖月抄云。浮舟ちふのをふくむとの事ちかく。ひひもそといつるも。ふとをべし。まづハ。
事ちうえおひ〳〵人〳〵をも。ひひもひ〳〵ほんの。浮舟ちふのをへうつるし。
ちうき世〳〵ん〳〵 日 〳〵ん〳〵ハ。〳〵女ん〳〵の係う。
いく源うとをぬべうバ 日 紫下ふ。浮舟うるおうべし。
月ぐろうこよおう〳〵 日 ふ記ぐくハ。そぐえおきそうるおも。此条乃
やうふ。祖母うすきもおうしふ。け条ハそ〳〵ふハいう〳〵うわて。
祖母うへ。ぎおるハ。月ぐろえぎうし。浮舟のんをうえ人とうるんもまき
ふそし。後びやきうるふつきそ。旬ちのすふつきそ。祖母ちへくハ。ふそ。

書名のおぼえなり。

おのづから筆に任せ（二ノ一）こまでは書名の組。（二ノ二）は地より高く

うるはしきをいふ。

筆のおどろきて（二ノ三）筆のおどろきてとは筆

のうごかりて。筆にうごかされてうごくをいふ

おどろくなり。

うるはしきは本より（二ノ四）いうへ此法ふでづかひ楷の古本

のうつし。ふるくして。楷の小法をいふ。もし楷ならば本といふべし。

楷の本ならべし。然もごとくなべては楷にして大きなる字のごとくいふ

だりのたぐひをいふ。なきまねびは楷書にて。行ふまれ

なるをいふ。

いとそうれうなるべし。

そうれうは（二ノ五）そうれうとは筆法の

うるはしく封へうるはしくかゝれべし。心源きはまりなき人の筆ふるくして。

をそうれうといふなり。情もおきけ本ぶり。ふる筆を見なべき

うるはしくかゝれる理を。まもりて今ふうの筆をいくとせぬと

とかうるはしくかゝんものうるはしくうつくしくをそうれうとはいふべし。

永をもむるには（二ノ九）女の筆ふるきを。ならひといへども。心向うる。字法のまの

方法。ついつるなり。ほふ。京のうるはしきをいつてはいふべからず。京のうる

はしくふるき京ぶりをもとめてうるはしくかゝんものうるはしくかゝんと

のうるはしくかゝんこと。京ぶりをあてはいふべし。

ゑ ゆりみでぐさ ぐ 宇治の ぐ 中宮をはじめ奉りて、女房たちも、一つ
ゝふきやうにて、中宮の御方なる弁といふ、ある限り、旦那の、け用をとゞめられし、
ゑふきやうにて、ひとりづゝ 同 れんじやうの御まへにて、うづゝ 裳とき
弁礼儀をおこなひ、を合せる給ひが裳を、深海ふきやうにて、し、
そのほどかのくり 宇治の ぐ そのほどぐ〳〵、おそくまで、給んまでのるし、は
あやまちなき。
おやめふあい 宇治の ぐ 旦那、ふづゝ、妹背をのるつるまで、仏母中宮の、
きびしくいさめふすばゞ、
へるゝ、ゝ、し、そのト旦那、そのうへ用ぐ〳〵、妹うに仏
そびてのうへをこえて、のよるし、 招き得ず。

とゞんふときぞてう 宇治の ぐ 弁ふるまで、仏母中宮の、
うへのすし、ふも疵あり、とゝいふまゝにて、
ふへうけてうべし、また疵ある、旦那のうへ乃疵
ようそうなり、んの疵とハいふべきふあらじ。
あうふるふやそ 宇治の ぐ 或おかし、けれどのそゞえを、おうふるふやそ
ぬをし、んの中ハ、ゝもうけ、ぐとし、といつようにし、又上うけつゞきを
もてそふ、そのよりおぐろうとゝふをぬを、旦那ふのふこの、
あうふるふやといつるやうふる事、いづもやそ、やをハ、そぐやのとし、
なぐへをうるまぐれるぞとゝう 同 旦那の裳を、未もくハ、をまぐれ
うぞと、ふひうて、みづ〳〵いまし、をる旦し、 住るがてう。

うかゞふやうにして　四十五のうら

とつゞくることゝ心得てやふなるべし。そのごとく。万葉にハ打ッへもなく。きゝそ

きづゝとかぞ〳〵　同　右のうたも。ゆくへうく。消えもはてなんやといふ心。

とゞきをどろ〳〵とひゞきて。ものゝ音もきこえわかぬやうなるを。ものゝ音もせねばや

なりて。ほかの物音も。ふかく聞えぬやうなるをいふ。万葉にハ。ものゝ音もきこえぬ

いつるも。そのうちの下句のごとくいふことゝ。まぎらはしくいふことゝ。

で。あり〳〵とハきこえ〳〵。先をうたがふことゝ。まぎれなきやうなるをいふ。

引うふハ。まづ見はなすことゝ。まぎれなきやうなるをいふ。

うかゞふやうにして　四十五のうら　障ふをうかゞふやうにして。人の

大意といふやうなり。

作せつゝきゝ歌ゝ心。此人ゝ

いつゝありかくつゝうふ　同　けうとふハ。うわの空にといふ中ふも。別して

ふといふも心。字治よりも。うしろにといひおこせて。これ別してはふらうきゝ。

うかゞふやう　同　白玉の仕方も。おもしろくハいとゞうわの空

をうをてゝうふもうく。まぎれなきやうにハ別してはふらうかるべ

しかたなかるし。

さそふ水あらばとハ思ふを　曰　浮舟君の身に自害をも思ひたちたまへるがハ

あれども。さはあらで自害のさそひなる方へゆかむとハ思ハねバ。此人の

心を述べて出でたるし。されバこそ思ひみだれて。身をなげむとハしつれ。

母乃京なれど物やわかんと　四十七のうら　思ひめぐり行なるべし。

いかなるにかありぞと思へど　曰　思へどハ。思へどを怪しむ意にて。母の。浮舟君に

思ふなるべし。さてかくいひて思ふを。もし懐妊にてもあらむかといふこと

なるに。乳母などが。石山詣も。月のさはりにてやとみるよしいへるなれバ。母の。

心得ぬるすに思ふべしと。浮舟君のかくいひいふをおぼさし。思へど也

さ。かくいひて心得バといふを。おぼやかなれど。よく味ふべし。

夫のうへなどのやうにこそ　四十八のおもて　にほどハ下にて。女どのまうしがあはる

なるべし。姉君も常にかりしまさバ。中君の。自害の方にておかしまさやう

に薫君の御方にて。中君にはたち。思ひあはせてといふも。姉君を

おほしまして八。中君と浮舟君と。まし思ひあふやうに。姉君も。浮舟君

とまし思ひあはせといへるごとし。まずめるをさて八次乃文に。とがむをめハ。

たゞ人にハ。といへるに名あらバ。もとの。弁が。など姉君と中君とのあるを

のみいひて。其中へ。浮舟君をバまぜていふを。母ハあしうぶちて。とが

むるをばハ。たゞ人にハといへる也とバし。

思ふやうなるをもみせのおもしろとてバ　曰　おもしろきつとハ。薫君の此心あらで。殊ふ

やく。浮舟君の。末長く。まで此あはせてあらバといふなり。

うく統べおぎ〳〵ねべきとぐふなり
ぶやうぐそん　名詞三つ　江海ふ．政官し．右政者ぬ被官ぬる名し．とつり．
人そうそうハを好ふる　名詞七のそう　旬まの．ほかふ毎ひまふを．そうねよと．まふ
ふを．人のそうぬべし．まやうふ．
ふ．といふまぬるべし．
ふがごとまそつうんもう〳〵　日　ふぐこ
かつぐで．そのそぐふつうぬこと
を．そうまふかつぐで．他ノコト
ふをいひく．そうまもも．ぬべし．いぐぬ
ばといふや．
ひないそう　名詞八のそう　こまそうわ之近が沼し．

一うく〳〵ふおぐ〳〵けぐそてよ　名詞九のそう　書ふれ旬まふ．いぐ
とへまうそも．一ふふ必ひまぐぬそのへし．
ぶぐうけまぬぐも　六段のそう　不道無道ぬどいふ統いうぐ．もし八武道
ふもつうんふ．江海ふ．ふそうまふ不調とを．こもよりかるべき．
かるもぐ〳〵　日　ぴ．ハ．ふの混まるべし．
いまやふ近ハそてふがてもう〳〵　日　右近がいふまハ．ほ毎ふ．書ふうよ
ぴ統ふも．旬まふよりぬふ．いづまふふ．事をくまるまぬ八
んことを統ふといふし．統ふ統ふ．旬まへまうぐ．旬ふまうぐ．とぐ〳〵へ
ふそぐ〳〵．旬ふまうぐ．ぬまうぐ．ぬまうぐ．ぬまうぐ．ぬまうぐ．ぬまうぐ．
まそそふひうまぎ　六段のそう　まそ八又うう．

ものへぞかゝくて　は不（ス）揃ふ。不揃ふはうつゝび。

いざうびかり　六十七ぢ（ウ）　拵きものゝ。そのうへいぼゝきとうつもの。

ういづくふうゝ　六十九のう（ウ）　此うゝまはよく。まもれぞと。こゝろうつゝ

のよく拵ものゝ。まもみはきて。うやかくやと論じきる時ふをしへまもる

三井うる筵が考へるいく。叶うふ上の結捻がやせる俵の下へはぐきて。

即チ結捻がやせる俵のみ。言へまうる話し。まバ強ふ結捻が頑かうみて

まるべきはるかふぐゝ世話へといつて。拵うきて。新いうるふをかつ

ぐといふまゝ。おをはらぬふうゝ。そまふつけて。

いづくふうといつて。二の旬ハ。結捻が。才をそてゝ。即ち。まへぐり

結んん。といつて。うをいつまて。結捻が。才をそてもし。かくらぬふも

拵のやうゝ。うる。俵のうゝ。やうに。ふ

ふとハ。拵うくゝと。海士がつて。うをいふ

もまべき。此俵俵をやうふ。実なるとうゝ。

こふかく。実ふ拵のうに。するやうに。ふまハ俵のお

かく生ることをやぐて、枝のうくくとほそかに咲いひろ〳〵て沼をもていつる。
る例今も伝ふるも多くは地へこぼれて、流るるを湖水
あつまるといひつゝ、書きとるべし。贈が法ぶまことといふ歟。

かまろふの光

れんぎ〳〵か移るべき　七のう〳〵　此ハ乳母がいふなれど、古理解
もいしやくをかて〳〵移ふるの　ふかるて移るべし。神〳〵ふ能説るごとくもむも乳母が語ふいふ。
かくへおそる人も　十九のう〳〵　兄弟のよいふ下　十八のかそ〳〵かる
ハごろ〳〵といつる字誤。考へ合べし。
る人のおそ〳〵おそせぞそ〳〵　十二のう〳〵　この文、注のごとくふもあれども。

まもるといひ、又さぐ先て夫をしもといつる文とふ伯をぐを見ハ、まる
人のおそ〳〵おそせぞハ、美ろのるふ思ぶ石ふ、ちかがく〳〵白ふのおそ〳〵ふ
ろの新ひ新りんてもといつるふもりんう、ふ美ろの新ひまりんてと
いひく白ふも新ひまりんのてふて、ふそ〳〵といつる文とハ、改先ていふ泊まて、又美ろも、もつふ白ふてぐ
先て新ひふこといひしといふし。
ぶなきかぎろ〳〵に　ふてハ、止のふふ、ちきぐふうれふがうんと
ひて沈うまでしいるり。
保うるぐまるばりかぐ　十二のう〳〵　かごまてハ、くいひるをふして

といふまでに、傍ふとつきそひて、ほとゝぎすなどの二字あるまで、作者おもひきるべし。

為ごと也。

ものおぼろ　十三のウ〜　景色をいふ詞にて、やまひ、才を学ぶなどにかぎらず、すべて

やむごとなく、おもきことをもふくめていふ詞なり。

うきさまざまを　同　永一人を朽さんをおもひやりて、詠

もとよりおもふ、おもきおもひなどばかりにて、うきことをいふ。

しをみつゝといふまでに、傍ふ字毎のんれもしげきをいふ。

さるかふふても　十七のウ〜　上ふ好ふがごとくをいひ、むんもおふふく

てやといつゝ、さかふふても、ゆきごぶしといきといきて　十八のウ〜

といふまで泪し、古き糸ふ秋風のおきごぶされだ、と

かれもふきごぶされだ、といふまでに、

こふふるまゝ好ふ日　十九のウ〜　云條院より二條院へうつり給ふ日にて、日ご

ろ、云条院ふおんせうきふ、下ゆ文ふてうつり給ふ。

ふくもちびる好　十九のウ〜　初二句ハ、橘のかちひふ、傍毎のうへ、こひ志

のびまゐらん、著ふのうつろひふ、ちごぶされだ、あふといふまでに、しちごぶされ

ぶれ人を、おもふまでに、なほ、ふくもちびる好、傍毎のう

をかうくかぎさんかハ糸をも收と結んがそのくきおゞふ蓋の
わくわハんしてゐべきところぞとし。
ゐひ物をといふ（ハのひ）ゐれ役のんくいふるよし。
そくくめたんざも（三のを）はの字いで。
いそのいませ結ハぬうと（ニのひ）下ろるかたいで止をいそでうと切てよめ
で下めかゞ。まるこ形をゞ。狂止よりつゞきて下のかゞ書そ穏る。
毎名めの一わおと形をゆの西（六三のを）をハ。もを誤る形るべし。
ゐひ多へるふくゆゞ（六四めを）くへを接て。えゐひくぬと
ゐひてうもゆ、うをくく（六五のひ）いうをくおゞてというでハ文と

ものひくく。
うつを（六四ウ）和名抄ふ。尨蹄子和名勢（セ）こ。貝類ノこくわ。さ
きバうつをハ。此貝ゆうくふ。空尨（ツヽセ）蹄子形るべし。
そくろ形るそぞか那（六三の）ゐひうくぬとよとふし。傍注しが了。
いう名かきもむこくふうくあゞせで（六五のひ）ゞをハゞめ借し。
大形夜のかくうこてうく（六六めを）こ目ハ上文よりつゞきふりわて
えきバ注乃めくふる当西条波又蓋名のそべくめんざ風ふりわて又且
ゞを。そゞくゆうめ。まづくく人ゞふゞんをかを結ゞをハ。をきくくてきう
ちふ結ふひゐゞハ。深ゆ名めゆをのくおゞをてゐ西いくぐるるゆを
ふうせぬう。かうしてけ小字ゐふハ。そうくんこをて。かうくひゆふ

きそて。今までまうそとやさでとまるとし。歩きのびあゆてとたゐ
ゐとも。始ゞ叶裏めきをてゆきもし。招き従もふぐ〳〵し。
かへ〳〵ゝバ 日 後撰集めかるてゐ。ゐをふぐ〳〵ゝバ。さ〳〵とにんそふぐきゐけゞとし。
まる事て。事例法ゐふゐふへ〳〵ゝバ。さ〳〵とにんそふぐきゐけゞとし。
ゐたゐとなり〳〵 日 かまこゝとと人のおもふまて。云乃ゐおきる例えて。うき歌ゐ〳〵。人のえとるゐ
とゐ〳〵ぬそこの。ゐ〳〵ゐをゐるゐ。ゐ〳〵ゐをゐるといふ〳〵ゐ。うけがゝ〳〵と。とがえと
ゐし。さて裏に書へ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐをゐるといふ〳〵ゐ。うけがゝ〳〵と。とがえと
人〳〵えと〳〵ゐ〳〵ふどの。いみ〳〵き歌ゐハせぬものを。法舟をのこふ
〳〵ゐふやうふいひて。かへ〳〵ゐ〳〵ゐと招きるよとし。ほゞと。歌きや

をもてとらする。御乃いまよりひふみぶり。

けふ給こび　日　をべく今日云の位ふかくびきを脱しといふ心。雅俗おハ
おハうみ〳〵といひ。位ふ礼をいふ。礼ふゆく〳〵とおくいふ礼を。雅俗おハ
ようこびといひ。こゝともきまをふて。ゑをおくりて。そがひる礼り。小
事おが局へ。きより給ふこびとつふようて。ほども。ゑ
のきを得まく祝ふ。ようこびを。だいを脱をもし。そがひるよう
こびそて。ゑ物ときみハがり〳〵ぬをこり。

人〳〵とやむこと祝きふ　此七のおり〳〵　止より。なり〳〵給ふ人〳〵とつゞきて。
かろ〳〵しからぬ。着ものの人〳〵をいふし。なり〳〵給ふぞといそぎ
して。なといつまでも知べし。小事おが人〳〵ふをだいび。

私座ふきり〳〵　日　ふる。ゑのきて。市ふ日の私座ふて。八講の終るし。
けふもとハいつまでもきるぞれ　此七のおり〳〵　いつまでもきるよりけふもとぶ出ずくん。
つゞけうん　日　堪うん也。今日ハ
おぶろう〳〵ぬしぬとてハ　此十二のおり〳〵　えゝとられバ。おぶろう〳〵ぬをし。
中まへやうんとし。ぬをぶぬる手ぬし。侍ほうぶ。
例の先ぬをもてるそぶふろう〳〵　此九のおり〳〵　例のさらきんぶちぬ。女房の
、高へ毎ふやうぬるそぶふハうぶ〳〵ぶるふやうといふし。
ろう〳〵ぶきり先をもみや　此十六のおり〳〵　或おふ。深ふおちぬ。ぬり〳〵かろて。
着ふふし。ろう〳〵ぶきり先やまぬうんとし。といつまでよろし。止ふ中え
の位ふ。大ぬもやうふをいそぶえ〳〵とうをうけてうるし。ほろし

ゟ萩の葉ゝ〳〵〳〵 四十七のうら 萩ちるべし。

よづゝなおゝゝゝ 四十八のうら 字ふかき詞なり。

はんそゝるものゝそゝ〳〵 四十九のうら 此句中ゟのはんゝゝハ女房ごとかり。

まるそぢめするハ。細流の徒のごゝ〳〵。

やむてかきもの〳〵姫ゟのこゝ 日 こゝハ仮名がんかゟゟゟと思ひく

らべゝるゟばいろんそて。下略。ゟの石のうへにてかきたまへし。

かぎりつゝとバゟの石ゟ苔のごゝ〳〵 五十のうら ひろがりつゝとバゟ。苔のごゝ〳〵

とゟ萩ごと。又萩ゟ姫石ゟ苔バ銀のえづり人のごゝ〳〵ゟあるべ

といふやうふもゟ萩ゟし。ゟべて限りつゝといふハ。上へ限ると。下へ限ると。

二つうゟゝ〳〵ハ。上へ限るし。下へ限るし。

そゝもむつゝ〳〵 五十三のうら そゝとハそゝもく〳〵とつゟほど。ゟべく

むつゝ〳〵ゟふべきゟれもかき人を。恥べきことゟと思ごと。云ゟ人のやうを

え結ふ。むつゝ〳〵かゝるべきゟれかき人を。ふりてそぢ結ゝぬい行ゟもさ

やうゟ詞ふやと。まゞいひく。今ゟ兵がみづゝ〳〵。美をふりゟゝかる

べきゟゟなるごと。そぢそて。ゝゝへをゟけよゝ〳〵のごるし。

かぞうりおもゟく〳〵 五十四のうら かぞうりおもゟく生れつきるゟふお意をそ

して。袖を恥んもゝそゝ〳〵。思ひ結ふ石う。生れつきるまゝふ。

おもゟくにつゝへをバゟゝ心といふし。みづゝ〳〵。かぞうりおもゟく

いふゟ。ゟそゝふおと思ひ者になりていふし。

宰さやかなるおきなごし　季ほのひと　一説に業のあれすこしといつてよろ
し。上のきこえへしえしゆゑあるすこし。此ある故。あまり翁先きこそ
いふも。宰さやかなるハらてハ従ふに。口ぎらうなるといふべし。
おもうゆゑ父への隔てしらきてそ　日　館に而一人あらざとかしやまんとやに
まハあらバ。らバなべて大方ゆゑうへをやせるにてそなどといふも。さかし
らとハ。さかしぶりて抽とりひわつるをいふ。父への心ハややなにつきてい
へる。
これても かの比抽ちぢゆゑ　曰　上にうれ弁が洞に。むつましく思ふべきゆゑ
なきへき。中く ちぢ給るぬみど。抽ちぢゆる代いつてきそうきて。まてるる
抽きちづるハ。恥べき者のいつるゆゑなれど。今女房をそうれ。抽ちぢしてかく

き給ふ。心ときて、ちぢ給ふ者ある時節なるらんとぞ。かのといひを
まといつるふんを依べし。かのとハ弁がいひしことをきていひ。それとハ、
今此時をさしていふも。うれるぞ恥あふ者ある時節なるべきに。ゑかなくての
我ハ心すきすこそ。とて。無し来るせんとぞ。かくのくあらき。恥あふぞ
き者とハ。かくるふ男などの来るにまろんとて。いろくへ無の業にふ
とかまて。え無らぬすふなりなして。そいつを給らんとのくあらむ。
おしなべてかくのこりえく　季あら　弁が抽ちぢもきび。ふにのくてたと
なく阿者らし。いつへをしる代。業のんに。おしなべて此女房者ハ。みな
かく給ごし。おと給きなるんと。思ひあふてそんなれど。
なかなやしゆるぞやえく　日　まづ男に女のゑ代いひきうきてハぶち

まうせてハ。取てせねことし。万葉集よりも多乃了ふまでハ。夫とれむ男ぬで
も。女のえのりせでさる所ろ。女のこゞろと男かいひきらをハ。昂ナ努めを
ゆるさふなりし。此細傳のこゝろなどハ。さまでハ。つゝしまざりしゞと。
程をのんべへのこゝろて。男か女のめびきもろハ。ずハ恥べきすあて
もし。今傳事ぬ。申ねが名をヤせしハ。句玄を先ぬとて。んやもく。
つゝれゝば。書玄ぬ。自玄のこゝろふ。うちをしくなげやう。
此傳ゆりしてを 曰 或ハ小自玄と。好色のすふつきてハ。移ときすのこゝ
とし。といつよろし。傳注。女一玄の方ぎ玄とつゝハしゞつ。
びんをきむつびかねりゆくたゝのなげえ 李云ぬ 大ゝのなげしハ。昂ナ
んねきむつびよねりゆくるぬ大ゝのなげし。びんをきむつびとハ好色

のこゝちむつびし。
移とまりがふ 曰 女一玄のうをふもとつゝハ。ゝとしし。
ふるべきこのうゝや移るべき 曰 こゝを。女一玄又自玄なげのうふかゞえて
つゝ統を。みる傳し。も〳〵移ゞバ。ねすふべきこのかをやおゝをべきとゝて
いふべゝを。移るべきといふぞうもん。これぞゝゞ。書ゝの。違ふ。窟ぬ何を
のゝゝつゝゝをゝ。又ゞ。書ぬ何ゝて。書へるのをゆて。ゝゝへゝていい
つゝ何し。ゝをゝ移ゝまゝゞ。ゞ。
ゝれハ移るべきうつゝつゝし。決る書ゝの何を。ゞ玄ふよゝて。又ゝの對半
の傳ふもてのゝゝをつし。
ゝうつゝとゝてゝゝ 古今和歌集

まのり　祖乃反　ノリ　同　食物ふんをつけてひすゆるをいふ。

いるがおとし　注ぐなどの如し。

まばいてそそくなどいへるとおなじ。

のそ。とハ。そのそしいへどもおなじ。

そそーと　土のそ　そしーハ。ふひしーを湯そかへ。

注きそそぐ　十二のひ　拭きそ云。ツキ　着漆領ぐるし。

注きする人　祖そ乃反　孟津よろし。

まのそ　ふたりしてそそぐ　同　注ぎ器。ヨをなぎんそ。

いでつそそろめ　ま。を。注ぎ器をいでつそそろめて。

此人のそひつぐるんふ。そそーくいつ。いそなかーうきそぐ。

うつわぐきふふふそうれ　器をそろへ。

ーそ　ふひそーてむ。

今えん　神ふれ　上云十二のひ　こゑハ汚ふ書ふのそ。を。女房ね

ぐの　ふつふ。なーべーいつれ　ハ白ふのはそ。を。女房ねのかく　ふつる。

おきの流。ゆーに　ふぐてくし。

大和のふそいてそそもえ　同　白ふのはそ。を。能々ふれ　ふそ。くいつる

ふそーべー。これそそやそーふへふそれふといふし。それおきハ偽し。

ふそ

ふそひふーつぐて　ふそひーつ　烏帽子成。上ぎふへふーつぎる。額乃さ

まはいつそ。つやーき　躰し。ふハかそうは縫きふも。烏帽ふきそるあり。

うやふきそうちされど　十七のひう　どハだの俣し。
ゐ方をなげしうう　古ゆゑ
おそうぐんぎるん　同　上文。おやいふといふより。いそぐあうせしく
いふまでハ。ほ舟ろのんを。そうぶにや文。おそぐんぎるこふより。地よりつふ
文そうふ。そのろふ。堺そうそ
おそぐうぐうされどうう　古三のひう　同をめ人ぢの。同じくいふりこと。ハ小生
のひへ三よそんと。そうふかふ。そまふ姑ぎうまて。え三より修うみを。
今日ハ。その志うふんうを。なぶきまて。三より修うも。ほとがてう。そ
ぶきまう出三うふあをつう
うちうかとがう　古ゐのひう　そぐよのつゆめ女の髪のうも。ハ和ハ。尼の

みえて。ものつゆめ髪ぎ
何ふそふんと　古六のひう
うう。

人のぬひとをぶう　同　人のぬひとハ。歩ぬ。尼が須ふ。そうぐなん人
をおそう修ひてうう。おぐうとがもうとハ。吹るまでしてうう
うふをつふうまと中おのひぎひる方めうていうのをまて。そめ
まんやそうていふあハつうび。さてうくいつるまハ。此中ぬ。尼ゑのむをめふおく
也て後。ぬ方をもまぶをれぐうう。ゑのひるぐう。さまぶ
浅舟ろをそ。んをかをそ。ぐ。ぐが中せるう。ゆうまぐび。ごまふそひめふ
てそおううまて。そづるし。ほいうぎるまふ。ゆそりぐう。

うつゝ〳〵うち思ひてぞゐる。 廿七のウ ぐふといふより。うつゝとつゞけまでハ。
注母の妻を。尼君の思ひやるうち。
〳〵の下のくゞハゞを借りてぞといふハ。地の詞なれバ。うつ
うちつゞきまゐりてゐる 廿八のウ 今まで行乃家もなくてぐ世をそ
じ給て。注母をふ。うちつゞきまゐりてゐるをいふ。まゐりんまでもいふ。
おく〳〵ふ日 異事也。
あつぐ〳〵世ゐる 廿九のウ まべく〳〵とハ。他のまを出て。他(ヒト)(ヨソ)(ヒト)
人(ヒト)ぐいふよごびて。つぐ〳〵世ハ。他(ヒト)(ヨソ)の野といふこと也。まて出
ふるとへ〳〵をハ乱ゐ〳〵ぬ 他人(ヒト)(ヨソ)ゐ呼びくること也。
うまれ出ゐる 卅のウ 尼云の。まうちの山のくいつるを。待といつるおと

ゐなくてまれ出ゐる〳〵ハよそふる也。荻原といつるも古ふふりぐ
ぬ〳〵ふつゞ〳〵ふ 卅二のウ 古ふふ号ゐうきをふる山乃をハ山
ぐふ。此山里ふ乱ハ。苦ゐ出ゐうとて。ぬくふつゞ〳〵也。をハ今又を
じ給て。尼君をおぐ人あるが。ゐゞむびきを。ふる人もをぐじげふれバ。此
山里を。苦ゐうき給ふふ。ぬ尼君とハ。え思ひ〳〵ゐゞびといひて。注母ふの
つゐ呼きをかこつ也。

うち山乃ふふく 卅三のウ 三の白ハ。なが給てふふふん也。雪の枝乃とハ。月
新のう〳〵へ〳〵ル梢乃雪也。注母ふ。ぬ尼君ふ。
いつ呼ふふふふふく 日 此歌の注。ふ尼ぐ〳〵。これハいつ呼ふふふ乃事ふ人

いまくでこそかゝらん。とある峯を。傳書なるべし。いかなるうらやて
とハ。此歌の里ハいかなる里なれバといふ事也。それゆゑかゝらんの下に。ど有ず
も属するなるべし。
るけぶちちりくしくりしきね　落葉乃部　花ハるりふりちりく。くりく。
くるし。手引し傳書なるべし。それを。篠に唱ふに。るけぶちしきね
などいふ詞ハ。まべくともおぼしきぞ。
あるまろ讃なうく　同　二の句。るふし。此書のすまも思ひといふ事とすべけれ
ども。それハ詞くらしぞ。されバあくもハ。あくかものまふて。犬尾氏の琴かもといふ
まかせるに。それも。ふともど。とのいへるハいかで心ぞしらず。
ある山里のきく　早秋部　並べて中ね乃みびりろのすむ。あるを。拙思ふ

身なればゞ今此山里らまて。秋の夜涼きにき猶を思ひ出りぬとも。
それ涼出ても。物思ひかふ身ときをバおのづから知とはんもかよふべ
きものぞと。次の詞より出り。涼ふ此る歌を涼舟のことを世ハこがり。
それハ次のおのづからしき詞りとかすハぞ。次する返哥ハ中ねのらすと
はんも無ふべしと思ふよりて。拙思ふ人と人を去りをとよ思るもおもひ
まじふをうしぞ。
むら川ぞしけやふかりてうく　同十乃部　此す。古物語をどふ見たなるべし
むらうだしのあや。ふきすむつる例を捨きむけうと。
おやりいま一ツびうく　同右此部　こ道よりつ涼舟氏のんきしてふらへ家
語あるふつゝりまづひしけふや。といふよりて下ハ地よりいふ語とす。

て。その場をきはめて。
狂みだりがはしくいふの意とこえたる語ふ 手古奈の巻 上ふなうらくあとろろぎ
人さまざまなる筋だてをつくろふうそのうそ。
のうそ。ふを法までハ。ふいふ。
法ごきたれ心なり絵ど 三十二の巻 世下ふ。
ありべし。本はもとゐてハ。文そのもぞ。
ふそ。ふをもほどけるをバつひさ 手口乃巻 ふそ。ふもお下。めしハ
るをバの下ふ。詞あらはるなるべし。
かく物ふれど悟を作る物り 日 仕
るべし。も。俗、笑ふる物ふバ。悟を作るとう文体し。おどけてふべし。

いとをづくり。おしおづくまる 手古奈の巻 えりおきおりおづくりそうる
ふる。おと。前の物ふ仕方をもし。俗語のいつをさづくりくおづをし。おと
ふり物ふ身とハ。字治ふて。えつをしる時のまねをし。世俗えりおきおりおふ
づくりするもおそうとふるし。さて深ふ名ハ。その物ふ身のまねびそ
うくおづをし。ほむがてし。
山伏そのか 歌日ぬぞうく 日 山伏の。
のきけいとくんがをき時ぞ。猪を打うくそうてし。ふりまねな人を。山伏
の風のくんがをきうをバふうざる俗。山ぶしハとふふをバし。ほうべ
ふ。山ぶしのえりぶ。ほふそのぞ。も。俗ふれうぶ。も。俗のまねべき。
山ぶしをふぞくてそまべき。

おくちよごぼる人をゝ　みそ七はひ〳〵　湖月抄説よろし。淳和奥のうち奥
名ありゝふ對へゝ。こゝちよげぼる人とハつゝし。
よの法もはゝ　みそ九のひ〳〵　淳和奥のいまゞ尼ぉぼろでよのは
孫乃ゝ為ゝてゝゝ　御よハ。世降ふ對面しゝふことハおゞ〳〵ゞかゝゝ
もおりゝゝ老ゞゝも。今ハ尼ぶぼり語ゝゝ男ゑれゞ悩ゞ語ふゝゝもゝゝま
ゞゞ法ゞ。ふやゝゝ〳〵かゝゝひやゝんとし。
ゝおかゝゝ乃ゝ〳〵　六十はひ〳〵　系をいゝひゝてゝゞゞ大ゝゝ法号
をいゝひゝ。尼ふハぼり語ゝゝるれゞも。仏とゝや。系をいゝひてのやうふ。
ゞひよせゝゝ老ゞて。ふをつゝ〳〵ゝゝてゝをゞゞまゞ〳〵とし。
ゝ雪ゆゝきゝ〳〵　六十一のひ〳〵　雪降きゝいふふ。ゝゝ男とゝふ

ゞ法ゝゝゝるべし〳〵。ゝゝてゝ系ハうき男ぼゞゞゞ。今ゝりハ尼ふのゝゝゝゝり
ゝてゝ。事をつゝゝてゝなゞ〳〵ふべゝゝゝてゝし。
いゝとゝやゝぼるべし〳〵　六十二のひ〳〵　大尼ふのむゝゝゝ。尼ふの味ゝんゝ。えま
ちつゝまゝふぼゞきぼゞどいゝゝも。大尼のむゝゝゝゝのやうふゆゝし。
なゝぼゝゝも。ゝゝゝ　六十八のゝ〳〵　ぼのゝゝハ。ゝのゝゝゝゝり語ゝをきゝ
なゞ〳〵を。ゝぼゝゝゝりハ。ぼゝいひゞ〳〵ゝゝし。
ゝゝし人ふなりてゝし。　六十九のゝ〳〵　淳和奥ぼゝゝし。此人ゝ。暁ふうせぬ
系ゝふふ心ゝゝゝてゝゝ〳〵ぼ。学ゝゝゝ。今ゝり後。又人ふもゝゝゝゝよ
のつゝひゝ人ゝなりてゝといふことゝし。ゝの学とハ。淳和奥の現人(ミツヒト)なりて。
後のゝゝをいふゝし。等ぼる系ゝゝとハゝでふうせゆるものふひゝゝ人

まんこと思ひつゝ、又対面もうハ、言ふ事もあるかぐ〳〵いひつゞけ、浮ふし、末の世もとらひ、言ひ残る事もいつゝ上文ふやぐてうせ、人〳〵思ひすてをやと思ひんとつゝふつゝかりてうるべし。注ぎも告いつゝきもがてゝし。但し院ちふ、伊勢物語、好みて出ふ入ちつゝ陽弁のそふ〳〵ひ給ふるまでゝ、又系抱りハせ〳〵とし。

いとゞつゝぎふ　七十比ちゝ　言ふのまゝ、白ふ、中ゝ物をてゝ

ふのづゝ〳〵かゝつゝひちるゝ〳〵　日　おのづゝ風のまぎれふそゞぬるすゞぐハ、

まんこと思ひつゝ、又対面もうハ、言ふ事もあるかぐ〳〵いひつゞけ、浮ふし、末の世もとらひ、言ひ残る事もいつゝ上文ふやぐてうせ、人〳〵思ひすてをやと思ひんとつゝふつゝかりてうるべし。注ぎも告いつゝきもがてゝし。但し院ちふ、伊勢物語、好みて出ふ入ちつゝ陽弁のそふ〳〵ひ給ふるまでゝ、又系抱りハせ〳〵とし。

いとゞつゝぎふ　七十比ちゝ　言ふのまゝ、白ふ、中ゝ物をてゝ

ふのづゝ〳〵かゝつゝひちるゝ〳〵　日　おのづゝ風のまぎれふそゞぬるすゞぐハ、

なり、白ふハ、中ふのみづゝ〳〵ちゝふるのことゝ思ふ事ひゝつゝ

ゑ、ゃゝべきやうを思ひ、きゝ〳〵かゝなんとの事ハ、言ふ事ハ、

きゞ記しきすゝとのゝつゝ、ふるゝ注ハいとゞそうし。

うきうす、ふつゝきゝつゝむてそ　七十のひゝもゝ　浮ふ事ふゝ、要ふ人をこ

と思ゞを、ゞ注ゝまゝ〳〵バとし。

夏深橋光

雲ふ夏深橋のす、ゐ海ふ引まゝる、前中ハ受けるうれうき橋ち

うち波〳〵物をてゝ受ふ事ふ、うまハふ事ふ、うまハふ受けふふハひゝ〳〵ば、万葉三

の巻ふ、ゞゆきハもさふハわしふ受けるゞ波とハ思ゝ〳〵まで湖ふあまや

を。又七のをか芳野作そ。又ひとつふもとに有名なるくぼを見ひらき見へたり。什麼(サヽ)吉野宮詩か。今日夢淵と。遺響千年流とつゞる。下は淵字ハ字誤歟。こゝもかの妻のうぐひを詩ゐるゐ。ゐふ夢淵とハ作まるし。こゝもかの詩をもてこゝまバ。ゐ〳〵紀よき所ゐて。人の往還きし〳〵そ絶歟と。よゐるハ什麼ゐるぞを。妻の淵ゐとそといひて。そこふるさせり〳〵情ゐゐゐべし。さてかの名ゐ三の句ハ。そのうち淵〳〵といへん料の。譬のことまし。そハいふもつまと。妻ゐるうちハ右乃名不要。妻ゐをハさうふなきを。芳野中ハとつゞるふつまて。紫式部と。妻ゐるとゝんな倶まる名。

ゐるさまをふ妻ゐるうちおをういづこふまるとゝ妻ゐふつまをまうハそぐ妻のことし。落ちぐまかゐてといひ。狭衣拙作ゐるそ〳〵沖松をんのうそもそてぬよとゐる妻ゐるうちおうき此妻の名ゐ。ゐるきおぐともふもいそゐるぐ〳〵什麼作のうべきゐし。作〳〵うちよりせて。きべらの名といをもゐふ。ゐがふぐ〳〵そ作をぬ〳〵そ下おんそ。そうぐべき。そもそ〳〵此拙作ゐ。まそ〳〵事おだとおそれぐと。みゐ作ゐうものがぐうおて。光源氏ゐといひ〳〵人をそぐを。行とも〳〵おとぐ〳〵。妻うえ〳〵うおだぐ〳〵ゐるを。ゐ

みそなはす世をおもふのこころおほくてえこそ
ださゞる夏のおほ〳〵しさ此池河をへてこゝ乃
おほ〳〵しきいふもハんおのきべきことぞかし。そハ
例のおそろ〳〵佛ぶこゞろと又もろ〳〵社周が云おこゞろを引
出る事ぞとをみな〳〵ゆるしたまへ。此池ふ
きりといひなすもをろかぞといふことをや中〳〵曩ぞ
へなべし。
らく け あのふ〳〵 労氣のうちよりいでゝ後の云ふ所方といふをより出たり。

年三月廿五日。皇后宮娀子崩ス。四月十四日。皇后宮ヲ巍ニ毅ス玉殿ニ
ス。九月廿四日。前皇后娀子ヲ改メ巍ニ葬リ奉ルふるふ。巍のことをも
らく 毅もて殯宮のことゝ云ふ事ハ皆池ふをわ
ゞバ。後の云ふ所ゆゑ〳〵ぬ古物風こゝろにこゝろえてこゝろ
とハみなうら〳〵ぬことし。ほゝゑまれん事ど
なゐぐハをゝむべきよ。ひら〳〵称どハ。次の母へう
かゞふ河し。なゐぐハいふら〳〵ゆるしてといふへうもり。
なをゐかんぐるりゐぐ〳〵 ハのひら〳〵 おとゝふふおぐをうてのこゝろふ
河し。

○おほをう〳〵九

ゑきぼし　十二のひら　指さきかむりのごとし。
これハ何事ぞ　十三のひら　備前ハ此頃やがて小君をかへし給ひつゝ
らんと思ひて。女のり。小君やうやうで給ひしとあるに。小君にハ望
ぞみ君ハ来ぬ夜に女のころえがらうて。これハ何事ぞといやしむ
あり。さていかなる事かハ君の孫ども。太政官の位役までといふにおよび。
きこゆるなり。
これてそのきハよしりなるべし　同　まさに備前より女わりつとめども。
何事もさぶらなるべしん心がさかりし此。此度の女君そ。よしりなる
事ハいひおとせ給ひつらんと思ふし。されどさたふる役の来しに又
しも来るハいづくとのこゝろ。いやしく親ぐしハいかり。傍より

これ末葉の女なるらんとし。といふハおぼつかり。心より備前の位をうくさと
まてといひしバ。備前よりふよりなるすゑをうけさせなるらんと思ひつるし。
あとびしにも　十六のひら　何海より悉といふよろし。みづからまかりし。
あらびしくつぶさるハ中きんのごとし。毎事ハいかゞせバ。
これ孫づらしおもし侍をうつぞと　十七のひら　ぞもじいかゞ行なるべし。
一本ふる。おりしまんぞなぐ。といへども。そらさもよろし。
備前より思ひゆるして　十八のひら　御に備前に免んじてこいふまこし。
家なぐしもどかしきふなん　同　さるぐしいやしそむきし人をかくま
で思ふことハ。家なぐしも。家人のもどかしく思りしを。まして人のうへにハことし。
そのあるかにて　廿のひら　のかど穏まれば。そのぬを保まるなるべし。花

和歌三代調類題

全一冊

書肆

尾張名古屋本町七丁目　永樂屋東四郎

江戸日本橋通白銀丁三丁目　同　出店